

石井十次における天職観の成立

山本浩史

はじめに

石井十次は、明治時代に岡山孤児院を設立し、孤児救済を実践したプロテスタントであり篤志家である。社会保障も確立もしていない明治時代の下層社会は、これら民間人の慈善事業により支えられていたといっても過言ではない。

石井は慶應元年、宮崎に生まれる。その後明治15年、岡山縣甲種医学校で医学を、そして、岡山教会でキリスト教を学ぶために岡山へ遊学する。石井は医学を学び、信仰によりプロテスタンティズムを深めていくなかで、偶然に貧児と出会い、医師を目指す傍らで孤児救済に関わり始める。このような経過のなかで、石井は孤児救済へとまい進していくのだが、この背景には天職観があり、これが大きな原動力となっていた。

そこで本論文の目的は、石井を孤児救済にまい進させた天職観に注目し、この思想の成立について考察することにある。天職観が形成される過程を考察することは、石井における孤児救済の原点を知ることでもあり、石井がなぜ孤児救済にまい進したのか、その答えを探す一つの手がかりになると考える。

1. 孤児救済以前のライフヒストリー

慶應元年、石井は高鍋藩士（現在の宮崎県高鍋市）の家に生まれる。石井の両親であるが、父親は明治10年、西南戦争に西郷軍として参戦している。一方、母親についてであるが、両親を失った石井の友人をまるで兄弟のように世話をし、衣類や物品等を与えたといったエピソードが伝えられている。この母親の姿から石井は、「予は他の友人に優りて幸福なるが故に他の予より不幸なる友人を助けざる可からずとの生涯の萌芽たりしなり」と幼少期を振り返っている⁽¹⁾。

石井は明治12年、東京の私塾「攻玉社」に入学するが、その翌年に脚気となり帰郷する。しかし、帰郷直後の明治13年5月13日、石井は岩倉具視暗殺の嫌疑により宮崎で捕縛され、鹿児島に収監される（以下、鹿児島事件）。この鹿児島事件は、その後の石井にとって大きな意味を持つことになる。

石井は同じ監房にいた西郷隆盛の私学校生徒から西郷の開墾談を聞き、「西郷南洲翁の吉野村会懇談を聞き自己の生涯に新進路を発見したることは是れ也」⁽²⁾と伝えられるように、自分の生き方にヒントを得ている。また石井は、この収監中に『皇朝名家史論』を読み、特に青山延壽『豊太閤論一の開卷』にある孟子の言葉、すなわち、「天授の大任」という命題に初めて接触する⁽³⁾。そして、収監よ

り2ヶ月後、無罪釈放となった石井は、「五指社」という集団を組織し、町内の路上にある馬糞などを拾い集め堆肥を作り、あるいは、荒地の開墾を行っている。

明治15年8月、石井は岡山に遊学する。これは宮崎病院で偶然に治療を受けた医師、荻原百々平から、岡山縣甲種医学校で医学を学ぶことと、同志社出身で岡山教会の牧師、金森通倫からキリスト教を学ぶことを勧められたためである。この時の石井における人生の目的は、「岡山県行許可 立志医学を修め帰郷医術を施し上江村の人民ために己れ自立のためにせんと欲す 信望愛敬」（日誌：明治15年7月22日）とあるように、郷里の人々のために医師になることであった。石井は、荻原の進め通りプロテスタント教会である岡山基督教会に下宿を請うが断られ、カトリックの岡山天主教会に下宿することになる⁽⁴⁾。その後、石井は医学を学びながら、夏季休暇には天主教伝道師を伴い帰郷するなど、カトリックの伝道に尽力するが、明治17年11月に金森より洗礼を受けプロテスタントとなる。

この後の石井は、明治20年1月1日の日誌にも記されているように、「キリストは三十年迦氏も亦た三十有余年各々其の年間はこの世に潜み充分に準備し而し後に出でたり是故に予は齡三十年までは之れを準備時間に與え自今八年間は医学書生として主一無適に医学の一点に向つて進み三十一年よりは此世に出で、充分に実地に働かんと予定せり矣 [之の予定は明治十六年十二月に於て已でに決せし予想也]」と、キリストや釈迦を自分の人生の道のりと重ね合わせ、医学を学ぶ30歳頃までを世に出る準備期間だと捉えている。

石井が改宗に至るまでのライフヒストリーを中心に整理してきた。この頃の石井における人生の目的は、西郷隆盛に影響を受けて設立した「五指社」の活動からも分かるように、郷里の人々のために貢献したいとの思いが強く、岡山に遊学し、医師になることも郷里の人々のためであった。この郷土愛の背景には、幼少期に芽生えた、自分よりも不幸な友人を思う気持ちが、基底に存在していたといえる。

2. 天職観の形成における素因

(1) 明治17年の夏休み（新島襄からの影響）

岡山縣甲種医学校で医学を学ぶ石井であるが、明治17年7月の夏休み、高鍋に帰省する際に新島襄の『同志社大学設立旨趣』及び『同志社設立の始末』（以下、始末書）を読み、これに大きな影響を受けている。そして石井は、この影響からなのか同年8月、郷里高鍋の上江村馬場原地区に教育事業の出発点となる「馬場原教育会」を設立する⁽⁵⁾。石井は、「予久しく先生にあい明治十七年八月埤原朝晩学校設立の原因は 明治専門学校一同志社設立の始末書一の刺戟 之れが誘因たることを話しせんと思ひしに今日は導きて先生にあい委しく此事を語らせ玉ひ」（日誌：明治22年6月5日）と記しているように、始末書に影響され「馬場原教育会」を設立したことを新島に伝えている。

石井の明治17年7月（日付不明）の日誌には、「左の一篇は本月京都商工会議所に於て私立大学校設立の義を謀らるるに当り同志社々長新島襄君が朗読されたる同志社英学校設立の始末の記事にして

新島君满腔の赤心を以つて同学校の設立を企図せられ此十数年の間日夜之か設立に困苦せられ遂に今日の盛大を致せるに至る迄の事情を詳に述せるものなり 余之を読んで大に感奮する所あり因て此れを記して他日の参考に供す」とあり、新島の始末書を日誌に書写している。

石井が書写した始末書の内容は、新島が脱藩し国禁を破り渡米したことから始まり、新島が米国で学んだ「北米開明の起源は学校にして其能く制度文物を隆興せしめたる所以要するに教化の力にして其教化の力の此の如く偉大なる所以は教育の法其宜しきを得るにある事なりと是に於て身の劣才浅学なるをも顧みず自ら他年帰朝の日は必ず善美なる学校を起し教育を以て己れが責任となさん事を誓ひたり」、「教化と文明の生命にして教育は治安の母たる事を悟り愈帰国の後は必ず一の大学を設立し誠実の教育を施し真正の教化を布き以て社会の安全を鞏固ならしめ以て我国の運命を待ち以て東洋に文化の光を表彰せん事を望み造次にも顛沛にも敢て之れを忘るる事なかりし」、「社会の安寧を保全せんと欲せば必ず真正の教育に依らざる可らず」（日誌：明治17年7月書写）等の文面を書写している。石井は、この新島の始末書から教育の重要性を認識した。さらに「方今我国日本に於ては現に戊辰の変乱を経て旧来の陋習（ロウシュウ）を破り封建の迷夢を醒め明治の新制を行ふの際真正の教育を布き以て治国の大本を樹立し以て人智を開発し以て真正の文化を興隆せざる可らず」、「渡米せしも亦只真正の開明文化と真正の自由幸福とを我日本国に来さん事を祈る丹心に外ならず」（日誌：明治17年7月書写）とあるように、新島が明治維新後の日本にとって、国民の教化が重要であると認識した箇所までを書写している。石井は「新島君满腔の赤心を以つて同学校の設立を企図せられ此十数年の間日夜之か設立に困苦せられ遂に今日の盛大を致せるに至る迄の事情を詳に述せるものなり 余之を読んで大に感奮する所あり」（日誌：明治17年7月日付不明）と記すように、新島の赤心と教育観に感銘を受けたのである。

それでは、具体的に「馬場原教育会」の設立に始末書が、どう影響したのかについて「馬場原教育会趣意書」の文面から考察したい。石井が起草した「馬場原教育会趣意書」とは以下のようなものである。

「本会は吾村将来文明開化の基礎を立て吾村三十九軒百九十八名兄弟姉妹の天与幸福を希図するの志より出づる者にして同心戮力以て吾村子弟の現今学令中にありて他日有為の見込みあり乍併家政困難其志を達する能はざるものを助け…（中略）…而て吾村に生まれ来る所ろの子弟の学問勉強の道路を開拓し吾村子弟をして其進路に駸々乎たらしめ以て吾村の教育をして益々盛大にし他日各其材料に従て国家幾分の補稗者たらしめんは素より我神州の兄弟と共に旗を東洋に耀々たらしめんと欲し先づ其志を団結し各其分に従て所謂一滴の水大海をなすの語を含み若干の金米書籍を（各自の志しに任せ）集積し以て之れか費に充て志を遠永に達せんと欲す」「人間として此世に生れ天に対し国家に対し一日も忽かせにす可らざるの義務に非らざらんや」

（馬場原教育会趣意書・明治17年8月※一部を日誌より筆者が抜粋した）

この趣意書からは、主に3つのキーワードとなる文脈が抽出される。

1) 「吾村将来文明開化の基礎を立て」

石井が「高鍋は実に児童教育の地 古昔より有数の人物この地より産出するにあに由縁なからんや」(日誌：明治29年11月10日)と記すように、高鍋は上杉鷹山などの人材を輩出した地であり、新島が「北米の文明開化の起源は学校である」と認識したように、郷里再興の柱を教育だと考えるようになる。

2) 「子弟の学問勉強の道路を開拓し吾村子弟をして其進路に駸々乎たらしめ以て吾村の教育をして益々盛大にし他日各其材料に従て国家幾分の補裨者たらしめん」

石井は、上述したように新島の思想から教育の必要性を認識し、教育により郷里の再興を図ろうとした。また新島の思想から、国家の発展には教育が重要であることも認識した。このことから石井は、「馬場原教育会」により、郷里の若者に教育の途を開き、国家の発展に幾分かの寄与する人材を育てようと考えた。

3) 「此世に生れ天に対し国家に対し一日も忽かせにす可らざるの義務に非らざらんや」

上述したように石井は、「馬場原教育会」により郷里から人材を輩出し、国家の発展に寄与させることを使命だと捉えている。このことから、新島の赤心と愛国心に影響を受けたことがうかがえる。さらに石井は、「兄弟と共に旗を東洋に耀々たらしめんと欲し」とあるように、日本に留まらず、東洋における日本を意識し始めている。

また、石井の明治20年の日誌に綴り込まれている「岡山孤児院の素因」(以下、「素因」)には、「其翌年(十七年七月)予は再び夏期休業のために歸省せんと準備をなしつゝ、ありき時に予は七一雑報に由つて同志社大学設立趣意書を読み大ひに教育の必要を認めると共に直に予が故郷なる村落中において貧困のため学校にも入学すること能はざる友人の不幸を連想し歸省の後は大ひに之れがために盡力せんと考えたり」とあり、郷里への思いがうかがえる。さらに、「然るに歸省途中汽船中にて同志社設立始末書を読み一層予が精神を鼓舞せられ日歸村するや否直に村内を遊説し左の趣意書と規則とを認め村内有志者を集め一場の演説をなし全村の賛成を得、馬場原教育會なるものを設け二名の貧児を救ひ一名の友人を之れを西京同志社に送ること、せり之実に吾が孤児院の起源なり」と振り返っているように、孤児院の起源は、「馬場原教育会」の設立にあったとも記している。

石井は、新島の思想に触れて以来、明治日本の社会を「維新以来明治政府を我民に施かる茲に十有八百年般の技芸學術等兄が知らるゝ如く非常の進歩を加えたりと雖も月累り年移り智識進み道德廢たるに從ひ上下一般奢侈に流れ安逸を欲するの有様をなすに至れり」(日誌：明治18年6月19日)と記すように、明治維新後の社会が進歩したとは言え、道德の廢退と治安を憂いていたことが分かる。この思いからなのか、明治21年の日誌には次のような記述がある。

「あゝ、実にこのまゝにして之れを放任するときはこの自業自得にあらずして此の苦界に沈める

ものは遂ひに惰怠放蕩に陥り即ち監獄の厄介物かよく進んで車ひき位のものにて世を送り獨り主の救に入ること能はざるのみかわ遂ひに國家妨害物となり國家の不良民として社会を害するものとなるべし之れを救済して普通の良民とならしむるものは私共神を信じ主キリストを信ずるものより外非常の愛國者にあらざれば誰れか此の任に当たるものがありましょーや」

(日誌：明治21年7月20日)

石井は貧民や孤児に対して、これを放置しておくことは、「國家妨害物となり國家の不良民として社会を害するものとなるべし」と考え、これを救済、すなわち、教育をして「普通の良民とならしむる」必要性を感じている。そして、これを実践できるのは、「神を信じ主キリストを信ずるもの」、「非常の愛國者」しかないとしている。このことから石井は、社会改良的な思考から感化教育の必要性を認識していたことが分かる。

(2) 鹿児島事件の解釈 (明治20年から明治25年まで)

鹿児島事件については前述したとおりであるが、石井は、この事件を振り返り、明治20年1月6日の日誌で、次のように解釈している。日誌には、「『孟子の曰く、天の將さに大任を其人に降さんとするや必ず先づ其心志を苦しめ其の筋骨を勞す』と予の此言を心に認めしは之れ明治十三年鹿児島獄中なりしがいまにして斯の如く心志を苦しめるの時になりしは之れ天われに大任を與え玉ふの準備なるかあ一々われ之れを知れり愛の神予を愛し玉ふが故に斯くの如く苦惱を與ふ玉ふて予を鍛錬し玉ふなる事」とあり、鹿児島事件による苦難を孟子の言葉から意味付け、さらに、この苦難をキリストの神から大任が与えられるための準備であったと捉えるようになる。しかし、この頃はまだ孤児救済がその大任であるとは認識していない。

そして、明治23年5月25日の日誌では、「天の父様よ會つて鹿児島獄中に於て示し玉ひし大任は即ち信仰的孤児院のことなるか」と記されるように、獄中での困苦が神からの啓示に捉え直され、その大任は孤児院であったと捉えるようになる。この前段階としては、「孤児を愛する己れを愛するが如くせよ (省略)」、「主吾等を誠めて宣く『わが爾曹を愛する如く爾曹も亦た相愛す可し此れわが誠めなりと』」(日誌：明治23年3月21日)とあるように、孤児に対する隣人愛が強くなり、「あ、われ孤児のために行かざるを得ざるなり、との思想心に満つる時は勇氣自ら湧く出せるを感ず、あ、之予が天職なるかな、あ、予は之がために造られたる器なり、た、聖旨のまゝに僕を遣ひ玉へ」(日誌：5月10日)との記述からもわかるように、自らを神の意を受ける器であり、孤児救済は天父から与えられた天職であると悟っている。このことから、「天授の大任」が「天職」へと結びついたことが分かる。

そして、その後も「勃勃として胸中に浮び来るは鹿児島獄中所感の孟子の金言なり」、「あ、予が活けるエボバを認めしは實に此の厄にあり然り而して予が自ら天の大任を負ふ勇氣の源泉亦た實に此の獄中所感の孟子の金言なり」(日誌：明治25年2月1日)、「從今十二年前の本日は則ち予が日向飢肥

に於て国事犯嫌疑のために縛につきしの日にして昨夜は即ち夢に捕縛に就きたりと見しの時なりき…此の凶らざる災難は之れぞ予が生涯大胆に自重自信此の大業に着手せし基礎にして即ち予が信仰の原動力勇進事に当りて屈せざるの湧泉なり」（日誌：5月13日）などと記されるように、益々この事件が天職と結び付けられ、信仰の原動力としても意味付けられている。さらに続けて、「予が心に思はざるの事実を何故に其の前夜に於て前知せんや人間以上の見ること能はざる神の告知にあらずんば能はずと於是始めて活ける神を認めたりき出獄の日父に面会せし時初めに発せし言は実に父よ子は神様の告をうけたりとあ、これぞ予が信仰の基盤也若し此の事業にして微かりせば予は今日の如き確信を持する事能はざる可しと思へり」、「拘留中読みし孟子の語は『天の將さに大任を其人に降さんとするや必ず先つ其の心志を苦しめ筋骨を勞す云々』予は此の語を読み潤然として悟れり天余に将来大任を負はせ玉ふなり」と日誌に記しており、鹿児島事件の困苦を神からの啓示とし、この困苦はまさに、神からの大任、すなわち、孤児救済が与えられるための啓示（困苦）であったと捉え直している。この再解釈により、石井は孤児救済が天職であると強く確信する。

(3) 明治20年・貧児との出会い

明治20年4月、石井の人生を大きく左右する出会いがあった。石井は持病である脳病（一説に躁鬱病とされる）を癒す目的で、岡山縣邑久郡上阿知村の診療所代診医師として赴任する⁽⁶⁾。石井が上阿知村診療所の代診医に着任する前の明治20年3月3日の日誌には、「本日化学試験に出で、不成績なりし予於是神意の存する所を察し受験の念を断絶せり あ、神よ僕は今まよりは如何なる方向に取りて歩むべきか御旨の在る所を示し玉へ」とあり、上級学校への受験をあきらめ、「将来のことに就きての考案（一）西京に行くべきか（二）上阿知村に行くべきか（三）尚ほ國許より学費を貰ひて獨学すべきか」などと記し、京都に行き同志社に入学するのか、上阿知村診療所に赴任するのか、あるいは、仕送りにより独学するのか迷いを見せている。このような迷いのなかで、石井は診療所の代診医として赴任する。そして、この村で最初の救済児童となる前原定一と出会い「明治十三年入監以来、恒に胸中を往来し居たる所謂天授の大任に就いての疑問」を孤児教育だと自覚する⁽⁷⁾。

診療所の隣にあった大師堂には、今で言うホームレスの姿があった。石井は、毎朝、この大師堂を訪れるのが日課となっていた。そして、ここで二人の弟妹に出会う。石井は二人に飯を与えた。この御礼に石井の元を訪れた母親は、二人を抱えては、職にもつげず男子だけでも預かってほしいと申し出たと伝えられている⁽⁸⁾。この男子が前原定一である。また、同じ村の魚商、藤原嘉一夫妻が、決して裕福でもないにかかわらず、孤児を養っていた話を聞き、その夫妻を訪ね感動したという。

その後、石井の元に同じような境遇の男子2人が加わる。石井は、西阿知村から岡山に帰ると三友寺本堂の隅を借り、妻と一緒に3人の孤児・貧児（以下、貧児も含め孤児とする）の世話を始めた。これが孤児教育会の設立となり、後の岡山孤児院となる。このときの石井は、まだ医師になることを断念せず、医師になり医業により孤児を救済することを考えていた。そのため再び高等医学校への入学準備を始める。石井の日誌には、「神様の御心を悦ばしめ奉らんがために、孤児院をたて、孤児院

のために医学校へ入り、医者とならんために勉強せり」(日誌：明治21年10月27日)とあり、神のため、孤児院のために医者になることを目指そうとしている。しかしながら、ここまでの道のりのなかで、石井はその選択に悩みを見せている。

例えば、明治20年4月27日「天賦の職任は一般慈善の事業にありわれ此の事業をなさざれば実に禍なり、われ此のことをなすも誇る所無し已むを得ざる也、若しわれ好んで之れを行さば賞を得ん、若しわれ好まざるも其の責任は我れに與かりて離れざる也」と記されるように、孤児を救済することは自分の責務であると捉え、明治20年7月12日「予は人に由りて事業をなすを断念せり、予は岡山に慈善會の本部を設立し茲に孤児貧兒教育院を置かんと非望せしかども 予はいまこれをなすを断念せり 予は上阿知にありて不動尊となりて茲に慈善會の本部を置き 予自ら之らが任に当り茲に孤児貧兒教育院を設けんと決心せり」と孤児救済会を設立しようとするも、明治20年7月19日には「暫らく慈善會のことを停止し卒業試験を受けんことを決心せり」と医学校を卒業することを優先させようとも考えており、「予が慈善會を設立せんと企圖してより、変心せしこと茲に於て二回蓋し鍛錬のためなる可し」とその思いを記している。しかし、明治20年7月23日の日誌には、「即ち本日三度目に断然受験のことをやめ奮つて慈善會設立孤児貧兒教育院を建設せんことを決定せり 而て本日は孤児教育院と治療所とを連結し一は以て該院の資金にあて一は以て極貧の患者を施療し本會の目的を遂げんと考案せり、而て予は上阿知に此の連結性孤児貧兒教育院と治療所の模範を起し同志の慈善家と共に全国に之れと同様なものをたて慈善會の目的を達すると同時に我國の医風改良を遂げんと欲せりあ、豈に愉快ならずや」とあり、孤児院と医院を連結させた運営を考えている。さらに、「即ち直ちに慈善會のために働くは神旨に叶ふこと、信ずれば也」と孤児救済を神意によるものと捉え、「も一予は誰れありて勤むるも之れに従はず一人の賛成なきと雖も神様の事業なれば必らず出来ざること無きを信するが故に、予は一人にて出来る丈盡す也」と決心をする。そして、明治20年7月30日「神の企圖し玉ふ事業をなすに豈に他人に藉るに及ばん予はたゞ神の御命令に従つて大日本慈善會なるものを(生涯の事業として)組織せんと欲す」と、孤児救済を生涯の事業であると悟る。

しかしながら、石井には、この大師堂で孤児と出会う以前に、孤児教育に関心を抱くきっかけがあった。石井は、明治18年8月に『西国立志編』第十二編(儀範を論ず)にある、「パウンズ、くつを補いながら、修金なき貧兒を教えしこと」の話を読み感銘を受けている⁽⁹⁾。このパウンズの話に惹かれた石井は、日誌のなかで「慈善會創立孤児貧兒教育院建築決心の記・予が慈善會のために働かんと欲するの念を起せしはまことに明治十八年八月十九日ガスリー氏がジョンパウンズ翁のことを或る客室の顔に見て之れが原因となりて義学を起こせしことの傳を読みて左の感語を記せしを始とす」、「予此文を讀みて感ずる所あり嗚呼パウンズはそれ何人ぞや己れ補鞋者にして而かも斯く如く貧兒の教育に汲々たり吾曹豈にこのことをきゝてたゞ演劇を見るが如く輕過すべけんや…(中略)…明治廿年三月三十一日命を奉じて將に邑久郡上阿知村に移らんとするや左のことを決心せり 予は病、難、苦、死の内にある兄弟姉妹と共にその苦しみを共に苦しみ而して其の喜びを喜びとせんと欲せり」(日

誌：明治20年7月23日)と記している。

孤児と出会った後の石井は「第一 慈善の事業を以て天父の聖旨を悦ばせ奉る事 第二 予の已棄物を利用して有用物となし以て國益を増進する事」(日誌：8月15日)と記すように、孤児教育の意義と目的を捉えている。この背景には、前述した新島思想からの影響がうかがえる。さらに石井が、英国ブリストル孤児院を設立したジョージ・ミュラーの存在を知ったことも、孤児救済において大きな意味を持つ。ミュラーは「信仰の使徒」とも呼ばれ、「神の栄光」のために信仰の生涯を送り、1836年、英国ブリストル市に孤児院を設立し、これを神への奉事とする。石井は、このミュラーについても「素因」で取り上げており、ミュラーの生き様に共感している。その思いを石井の日誌から読み取ると次のような文脈が抽出される。初めて石井がミュラーを知ったのは、明治20年であり、5月28日の日誌には「ミュラー氏京都演説 信仰とは即ち神の語を確信する義にて聖經一部のみか全体に関せり他の諸徳は枝葉にして之れを得ば隨て榮えん」と記している。そして、明治22年1月4日「六十余年間に於て経験せられし数多の神恵事実とことに祈祷に由りて孤児院を設立し且つ今日に至るまで之れを維持せらるるの演説を新聞紙上に承知し」とあるように、石井は信仰と祈りにより、孤児院を運営してきたミュラーの姿に魅かれている。特に明治23年では、3月9日「読信仰の生涯ミューレル氏の神と偕もに歩むとの説教を読みます々同氏の(信仰はもとより)徳を慕ふの念を増進せり」とあるように、ミュラーの信仰の生涯に共感し、「ミューレル先生閣下 閣下が千八百八十七年我國に渡來し天父の御慈愛と信仰祈祷との能らを證明なし玉ひしことに由つて小弟は大ひに悟る所あり同年いよ々決心し同九月三名の孤児を以て一寺院を借り孤児院を設立し…(中略)…本院孤児の写真一葉を呈し御禮の印となす閣下幸に本院のために天父に感謝し尚ほ吾国無数孤児弟妹等のために祝福を御祈祷あらんことを伏て奉希望候」(日誌：8月22日)とミュラーに手紙を送り、ブリストル孤児院を訪問したい思いを日誌に記している。

(4) 明治22年1月・医師への道との決別

松山監獄での伝道活動からの帰り、石井の心に変化が訪れる。このときの石井の日誌を見ると、天賦の職分を確信す可し」と記し、「生命あるものは外物を消化して自ら生長し、死せるものは外物のために変化せらる 斯の如く青年にして已でに天命の職分を信じ一の理想を組織せざるものは世の名誉利達の如き風潮に従ひて之れが爲めに左右せられ古人の傳記を読んでは之れが爲めに変化せらる而して自ら之れを消化して生長すること能はず」(日誌：明治22年1月5日)とあり、自らの使命について考えている。そして、その翌日の日誌には、「歸岡後の覚悟われは我が往くべき路程即ち医学全科卒業を(職分を遂げんための手段)なさんがため之れより主一無適に勉強せざる可らざるなり」と医師を目指すことを再確認している。しかし、松山から多度津に向かう1月7日の日誌には、「靈を拜して医学を棄てんと念起れり」とあり、昨日とは一転する。そして、1月8日(多度津滞在中)の日誌には、「朝いよ々医学を棄て、靈と共に神様の御用に從事せんと念勃々として発せり」とあり、単なる気まぐれではなく、本心から医学と決別しようとしていることが分かる。そして、1

月10日、「本朝靈の御助けに由り医学を棄て神様に奉事するの決心をなし四ヶ年間学び獲たる医書を焼盡せり」、「予が本朝の心事まことに斯の如し予は実に神の靈に由りて役事をなさんがために數十冊の医籍を焼盡して糞土の如く思ひしなり愉快なりと謂つ可し」、「妻子が決心を見て悲惜の深谷に陥れり」と未練もなく医師への道を捨てる。この1月6日から7日にかけて、石井のなかで何が起きたのだろうか。

1月6日、石井は松山において、孤児救済会への会員募集（寄付金集め）を行い、孤児院における神の御恵について演説している。この演説の後に記した石井の日記には、「神様は御用無きに導きて旅行せしめ玉はず是故に爾よ爾来一所に着したらんに何の獲物も無く無手にして中途にして去る勿れ」、「神様は無用地に遣はし玉ふこと無し是故に御用を首尾よく終るの後に其地を去る可し」とあり、石井が松山に来たことの意味を、神からの啓示であると捉え、何かの意味があるのではないかと考えている。そして、翌朝の1月7日、「蜂谷兄との談話の際心の眼開けて聖靈を拜することを得両手全体を捧げて神様に奉事せんことの念起れり（省略）」と日記に記されている。伝記においても、今治のクリスチャンである蜂谷徳三郎と面談し、この対談により石井の心が動いたとだけ伝えられているが¹⁰、明治22年1月4日の日記には「蜂谷徳三郎が三年間貧困の中に己が食物を減じ祈祷と親切とを以て涙の内に養育されし小児にしてきしよ女が入院してより爾来は常に他小児の光となり慰めとなり」と記されており、蜂谷の孤児を救済する姿に感銘を受けたことが分かる。さらに蜂谷について「肉体の父母を失ひし孤児も天父をあば父と呼ぶをうるの幸福を見るに至れり」と記しており、蜂谷の姿に影響を受けたことが推測される。

3. 天職観の形成過程

石井の天職観形成における素因について述べてきたが、これらを整理すると、次のようにまとめることができる。

まず、石井における天職の出発点は、明治13年の鹿児島事件での体験である。この事件で西郷隆盛の開墾談を聞き、そして、孟子の言葉に出会ったことが大きな意味を持つ。特に孟子の言葉は、石井自身が信仰における源泉となったとするように、「天授の大任」がプロテスタンティズムと結びつき、これを神からの啓示だと捉えていく。

また明治17年では、新島の思想に出会ったことが大きな意味を持つ。これにより、石井は教育思想に目覚めると共に、国家の文明開化と社会安寧へと、その視点が開かれた。ここに政治的で思想支配を意図としない、純粹に国を思う愛国心が、石井に芽生えたことが分かる。この愛国心は、この後、孤児教育へと結びついていく。そして、さらに日本に留まらず、東洋にもその視点は向けられ、東洋のなかの日本の位置付けに着目した視点が開眼している。

医学を学び、プロテスタンティズムを深める石井であったが、貧兒と出会うことにより、孤児救済に携わることになる。しかし、その背景には、『西国立志編』にあるパウンズの話に触れ、孤児教育

に何らかの関心を抱き、上述したように新島の思想から教育観を得たことと、社会改良思想に覚醒したことが大きな意味を持つ。

石井は一人の貧児と出会ったことから孤児救済会（後の岡山孤児院）を設立し、孤児の救済を始めた。明治20年8月15日の日誌には、「予の精神 第一・慈善の事業を以て天父の聖旨を悦ばせる奉事 第二・世の已棄物を利用して有用物となして以て國益を増進する事」とあり、慈善事業、すなわち、孤児救済を神への奉事とし、国家のためにこれを行うことを考え、「神様への御恩報として多くの孤児のため働きてこの孤児院を發育さえしめ多数の善良なる生徒を出だし益盛大に進歩せしめ…（中略）…神恵の雨澤によりて之れを教養せんと欲す之れ予が生涯の神に対し國家に対し兄弟姉妹に対し此世にありて盡さざる可らざるの義務なりあ、神様よ…（中略）…医術の杖を與え玉ふて此世に立たしめ生涯の間此のあなたの悦び玉ふ事業に従事せしめ玉へ」（日誌：5月28日）とその思いを記している。これらの文脈からは、これまで見てきた愛国心とプロテスタンティズムが重なり合い、結合されたことが分かる。

その後の日誌には、「名譽や私欲や安楽の望を絶ちあなたの御爲めにゾーキンとなって働くことに決します故にあなたは何卒此僕を見棄て玉ふことなく常に聖靈の御手を此の僕にをき玉ふて聖旨のまゝにあなたの御用を勤めしめ玉へ」（日誌：明治21年1月31日）、「あ、人は天より賜ふに非されば受くること能はざるなり、た、自ら謹んで己が職分を竭くせ」（日誌：明治23年5月7日）などがあり、さらにその思いは深まり、「あ、われ孤児のために行かざるを得ざるなり、との思想心に満つる時は勇氣自ら湧く出せるを感ず、あ、之予が天職なるかな、あ、予は之がために造られたる器なり、た、聖旨のまゝに僕を遣ひ玉へ」（日誌：5月10日）と孤児救済が天職へと結び付けられ、「予は名譽のためにするのあらず神の聖旨を悦ばしめ奉り下は孤児弟妹のために幾分の愛を盡さんと望むなり」（日誌：7月9日）と記すようにプロテスタンティズムが深まる。ここに石井における天職観の成立が見られる。

おわりに

石井における天職観の成立について考察してきた。石井には、幼少期より友を思う気持ちが醸成され、これが郷土愛となり、郷里や郷里の人々のために貢献したいとの思いが、石井に強く存在した。そして、鹿児島事件において「天授の大任」という命題に触れ、自分の使命は何なのかを考えるようになる。このようななかで、石井は新島の思想と出会い、これに影響を受け、新島の思想から教育の重要性と、国家の発展と社会安寧における教育の意義について学んだ。このことがきっかけとなり、その視点は、郷里から明治日本に向けられ、石井のなかで愛国心が醸成された。この過程と同じくして、石井はプロテスタントとなり、神への奉事、すなわち、神の栄光を増すプロテスタンティズムを深めていった。そして、この過程のなかで、愛国心と神への奉事が結びつき、石井の天職観が成立した。この天職観は、この後、石井の信仰のなかで、さらに深められ、孤児救済が神から与えられた自

分の使命、すなわち、天職であることを確信させる。このことから、石井の孤児救済において、この天職観の成立は、大きな意味を持つことが分かる。

註

- (1) 『明治20年・石井十次日誌』の附録にある「岡山孤児院の素因」のなかで、石井は、岡山孤児院設立のひとつとして、石井の母の姿を素因として取り上げている。
- (2) 柿原政一郎著『石井十次略傳』岡山孤児院事務所、1924年、第3版、pp4-5。柿原は、明治16年宮崎県高鍋に生まれ、明治33年に岡山孤児院義捐金募集の仕事始める。明治44年岡山孤児院評議員、大正9年衆議院議員、昭和28年日向興行銀行（宮崎銀行）創立二十周年記念日向文庫より『石井十次』伝記を著述。昭和37年永眠。『柿原政一郎先生年譜（資料）』昭和42年（五周忌）、伝記刊行準備会編より。
- (3) 石井記念協会編『石井十次伝』大空社、1987年pp14-17
- (4) 同上著、pp22-23
- (5) この馬場原教育会では、次のような事業が行なわれた。①遊学生の県外派遣、家計が裕福ではない18歳以上の者の遊学支援を行う事業である。石井自身も岡山に2人の遊学生を迎え、これを支援するために、あん摩を習い副業をした。②朝晩学校の設置（埴原朝晩学校）、貧家の子弟を寄宿させ養育し、昼間は家事労役にいそしみ、朝夕の余暇に学習することから朝晩学校と命名された。今でいう補習教育、あるいは、学習塾のような存在である。また「埴原」と頭文字につけられることもあるが、これは集落名である。③書籍貸与、主に有志者から寄贈された書籍を集め、これを貸与する事業である。石井は新島から影響を受け、郷里の若者や児童のために「馬場原教育会」を設立し、このような教育支援システムを構築するのである。
- (6) 石井記念協会、pp34-35、P40
- (7) 柿原政一郎前掲著、P10
- (8) 石井記念協会、pp40-41
- (9) 同上著、pp42-44
- (10) Samuel Smiles (1858)SELF HELP (=1871、中村正直訳『西国立志編』1871、再録:1991、『西国立志編』講談社、P475)
- (11) ジョージ・ミュラー(1805-1898)。プロテスタントであり、イギリスにおいて1836年、ブリストル孤児院を設立する。その運営は、神への祈りにより寄附金などで運営され、その姿から「信仰の使徒」と呼ばれた。
- (12) 石井記念協会、p51

参考文献

- 葛井義憲著『闇を照らす人々』新教出版、1992年
現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善、2000年
徳富蘇峰著『日本精神と新島精神』關谷書店、1936年

室田保夫著『キリスト教社会福祉思想史の研究』不二出版、1994年

吉田久一・岡田英己子著『社会福祉思想史入門』勁草書房、2000年

ランス・ワベルズ編・齊藤登志子訳『ジョージ・ミュラー 信仰』いのちのことば社、2003年